



『だんどん ももんちゃん』
 作/とよたかずひこ
 800円(童心社/2001)
 だんどんだんどん、だんどんだん
 どん。ももんちゃんが走っていく
 先には、何があるのでしょう。



蒼くん (11カ月)



京太くん (1歳7カ月)



『くっついた』
 作/三浦太郎
 800円(こぐま社/2005)
 ページをめくると、「くっついた!」
 の繰り返し。金魚さんも、アヒルさ
 んも、ゾウさんも、み〜んなくっつ
 いた!



『だるまさんが』
 作/かがくいひろし
 850円(プロンズ新社/2006)
 「だーるーまーさーんがー」と、
 おなじみの遊び。でもそのあと
 に隠るのは「ころんだ」ではな
 いところがたまたま楽しい。

特集

赤ちゃんと 1・2・3歳

いっぱい
読んで
いっぱい
楽しもう

の絵本

おなかの赤ちゃんは、妊娠18週を過ぎるころからすでに聴覚が発達していて、外の世界の音も聞こえているので、読みきかせをすると、その声もきくと届いていることでしょう。生まれたばかりの赤ちゃんにとって、言葉はわからなくても、いつも身近に聞いている声で絵本を読んでもらうことで、安らかな気持ちになるのです。ぜひ、育児中のご両親も赤ちゃんと一緒に絵本を楽しんでください。2000年以降に発行された絵本をご紹介します。



ひなこちゃん (1歳3カ月)



『びょん』
 作/まつおかたつひで
 780円(ポプラ社/2000)
 カエルが、びょん。ネコが、
 びょん。イヌも、びょん。カ
 タツムリは? びょんってで
 きるでしょうか?



萌音ちゃん (9カ月)



万葉ちゃん (7カ月)



龍太くん (9カ月)



『ぎゅっ』
 作・絵/ジュズ・オールバラ
 1,400円(徳間書店/2000)
 子ザルのジョジョくんはお散
 歩中。ゾウの親子も、ライ
 オンも、キリンさん
 もぎゅっ。ジョジョはママが
 恋しくなっちゃいました。



対象別おはなし会のプログラム例をご紹介します。

ここで紹介する絵本や紙芝居は、ご家庭での読みきかせにもおすすめです。秋のブックガイドとしてもご活用ください。

行事絵本・季節の絵本

紅葉

「さわさわもみじ」

作/ひがしなおこ
絵/きくちたつろう
800円(くもん出版)

風が吹いて、空に飛び出したもみじさん。くるくる踊って、ふんわり落ちた。また風が吹いたら、さわさわさわ、飛ばされた。



月

「月おとこ」

作/トミー・ウンゲラー
訳/たむらひゆういち、あそくみ
1,500円(評論社)

月おとこは、毎晩地球の人たちを見おろして、うらやましく思っていました。とうとうある日、流れ星のしっぽをつかんで、地球にやってきました。



敬老の日

「はやく あいたいな」

作/五味太郎
1,200円(絵本館)

ようちゃんはおばあちゃんに、おばあちゃんはおやちゃんに、急に会いたくなって出かけます。ふたりはちゃんと会えるでしょうか。



紙芝居

「かにむかし」

脚本・絵/田中啓一 作/木村次郎
2,200円(童心社)

さるとかにどんが登場する、おなじみ「猿蟹合戦」のおはなし。「日本五大昔ばなし」のひとつです。



紙芝居

「おはぎ べたべた」

脚本・絵/土田真晴
1,400円(童心社)

おばあちゃんが、あずきを洗い始めました。何ができるのでしょうか? キキとククンも、手伝います。



(安富ゆかり)

プログラム 小学校低学年

どこで/教室 所要時間/約15分×2
テーマ/秋を絵本で楽しもう!

このプログラムのポイント
景色の美しい秋、なぜかとてもおなががす秋……。前半は軽め、後半にしっかりめの構成にしました。

プログラムA

①「詩「ひがん花咲いた」

「さくらが走る 宮田滋子童謡詩集」より
詩/宮田滋子 絵/武田由子
1,200円(金の館社)

赤い色とその形が印象的な彼岸花の詩から始まります。どんな花かみんな知っているかな?



②「ヒガンバナのひみつ」

作/かこさとし
1,300円(小畑書店)

彼岸花には秘密がいっぱい。そのまま読むのではなく、ブックトークの形で紹介します。見返しに土地言葉での名称一覧があるので、住んでいるところの呼び名を紹介するのもおすすめ。



③「おひさまいろのきもの」

作・絵/広野多利子
1,500円(福音館書店)

表紙には、主人公とともに美しい彼岸花が、着物ができあがる工程や秋祭りのようなど、日本らしさがあふれる絵本です。



プログラムB

④「きょうのごはん」

作/加藤保土
1,200円(信成社)

表紙のさんまのおいしそうなこと! 隅々まで丁寧に描かれた食べものたち。見れば見るほどおなかのすく絵本です。みんな、夕べは何を食べた? そして今日の晩ごはんは何かな?



⑤「ざぼんじいさんのかきのき」

文/すとうあさえ 絵/藤茂泰子
1,300円(岩波書店)

おいしい柿の実をひとり占めするざぼんじいさん。隣のまあばあさんがおすそ分けしてもらえるのは、へたや葉っぱや枝ばかり。けれど、とっても楽しそうですよ!



(間片千春)

プログラム 未就学児

どこで/幼稚園、保育園 所要時間/15分×2
テーマ/森の宝物、秋の味

このプログラムのポイント
秋はちよっぴりせつないけれど、森や林ですてきな宝物が見つかりますよ。おいしいものもたくさんあります。

プログラムA (3・4歳)

①「あんどろくん」

作・絵/のぞみ 秋
品切れ準備中(ポプラ社)

あんどろくんのお仕事は、高いビルの窓ふき。今日も上から街のにぎわいを眺めます。気になるあの子のお店も見えますかな。



②「どんぐりころちゃん」

作/みなみじゅんこ
1,100円(アリス館)

わらべ歌にあわせて読んでから、もう一度しぐさをつけて遊びます。最後の「はちくりしょ!」でじゃんけんをしてもいいし、どんぐりを手の中に隠して「どっちだ?」と問いかけても。



③「ナミチカおきのこがり」

作/長谷川幸
1,300円(童心社)

ナミチカは、おじいちゃんと一緒に始めるきのこ狩りに、不思議な展開を楽しんでもらえるよう、丁寧にゆくり読みます。



プログラムB (5・6歳)

④「いろいろだんご」

作/山岡ひかる
800円(くもん出版)

おいしいおだんご、いろんな名前。お月見だんごも出てきます。



⑤「きのこ ふわり孢子の舞」

写真・文/菊池新
1,200円(ポプラ社)

光に透かすと孢子が見えます。美しい写真で、きのこの不思議にふれてみましょう。無理に解説を加えなくても、本の文章のままで。



⑥「ファーディとおちば」

作/ジュリア・ローリンソン
絵/ティファニー・ピーク 訳/木坂涼
1,400円(理論社)

仲よしの木がひらひら葉っぱを落とす。ファーディは心配でたまりません。落ち葉の季節はちよっぴりせつない。



(米原木ノ実)

プログラム 0・1・2歳

どこで/子育てサークル 所要時間/30分
テーマ/おべんとうって楽しいね

このプログラムのポイント
おべんとうも絵本も開けるときのワクワク感はサイコーです。みんなでおなかも心もマンブクマンブク。

①「いないいないばあおそび」

作/きむらゆういち
680円(信成社)

元気にごあいさつ“こんにちは〜!”。最初はいないいないばあで遊びましょう。みんなも一緒にできるかな?



②「びっくりいろおそび」

作/チャック・マーフィー 訳/きたむらさお
品切れ準備中(大日本図書)

「何色?」と色を聞いたり、隠れている動物をあてっこしたり。緑色やピンク、白と黒の動物って何だろう?



③「さつまのおいも」

文/中川ひろたか 絵/村上康成
1,300円(童心社)

秋はおいしいものがいっぱい。さあ!! みんなでおいも掘りにしゅっぴーっ!



④「おべんとう なあに?」

作/山崎 幸 絵/高橋茂樹
1,000円(信成社)

おいも掘りの次はおべんとうを持ってピクニックに出かけましょう! キツネくんやゾウさんのおべんとうは……? オ・タ・ノ・シ・ミ!



⑤「おべんとうぼこのうた」

構成・絵/さいとうしほ
900円(ひさかたチャイルド)

ユーモラスなおかずさんたちと手遊びを楽しみましょう。にんじんさんなどは指を使わずに手をたたくなど工夫してみましょう。



⑥「ばっぴぶっぺほん」

絵/もろかおり 文/うしろよしあき
1,300円(ポプラ社)

ばっぴぶっぺほんは魔法の言葉。ばっぴぶっぺほん……で変身です。



⑦「びょーん」

作/まつおかたつひで
780円(ポプラ社) ※大型絵本版もあり

最後はみんなの大好きなびょーんです。大型絵本で読むと迫力満点です。かたつむりさんも跳べるといいね! みんな一緒に“びょーん!”。



(伊藤知子)

著作権保護コンテンツ

OWNERSHIP …当事者意識

「ぶくちゃんのすてきなばんつ」を、1、2、3歳児の異年齢のクラスごとに読んだときのこと。

「まず1歳児は、ぼかんとしながらも興味を持って見てくれました。3歳児ともなると、少し余裕が出てきて、ニヤニヤ笑ったりしながら見てくれる。

けれど、2歳児は違うのです。彼らはすごく真剣な表情で、食い入るように絵を見つめます。描かれている“おもらし”が、まさに今の自分自身の問題で、心あたりがあるからなんですね。でも、ラストのパンツづくしの見返しページでは、いっせいに押し寄せてきて、パンツをあこれと指さして選り、楽しんでくれました」

子どもの発達年齢ごとに、反応が如実に異なるおはなしなのです。

ひろかわさえこさんを知る

5つのキーワード

「絵本に興味を持つきっかけになったのは、中学生のときに特本幸造さんや谷内こつたさんたちの描く至光社の絵本を知ったからです。園期的な美しさにカルチャーショックを受けました」



MOMOIRO SANGO …ももいろさんご

「美大在学中の一時期は、テレビ局で番組美術のアルバイトに勤んでいました。「ひらけ! ポンキッキ」の中に、文字や数を教える“スポット”と呼ばれるコーナーがあって、その絵を私たち美大の学生アルバイトたちが描いていたのです。

当時は「およげ! たいやきくん」の歌が大流行していたところで、大学の授業よりもバイトのほうが忙しかったくらいでした。

あるとき絵を描いていると、隣のスタジオから「ちょっとこっちへ来て」と言われ、背景のペーパーサートの絵を動かすお手伝いをしたのですが、それがまさに「およげ! たいやきくん」の一場面だったの。ももいろさんごが手を左右に振っている場面がありますが、あれは私なのです!」



ふかふかの懐に抱かれ眠る、リスの子どもたち。



スケッチのお供は、グラフィッククレヨンと7Bの鉛筆。



スケッチブックには、瀬戸内海・視鳥の橋とカラスウリが。



「最近、水彩を用いて描くことも増えてきました」

A DORATION …憧れの作家

「中学生のとき、おこづかいで筑摩書房の宮沢賢治全集を買い、「よだかの星」でぼろぼろ泣きました。いわさきちひろさんの『戦火のなかの子どもたち』(岩崎書店)も、このころ出合った心に残る作品です。

とりわけ好きなのは、ヘルメ・ハイネ。結婚式を挙げる豚が、最後は泥こに飛び込んで遊ぶ『The pig's wedding』(未邦訳)を知って以来、ファンになりました。「ぞうのさんすう」(あすなろ書房)では、作家としての深さに感服。日本では「ともだち」(ほるぷ出版)、「きみがしらないひみつの三人」(徳間書店)などがありますが、翻訳本が少ないのがちょっと残念。あの絵の自由さ、のびやかさは何度見ても、本当にすてきです!」

B OOK …本

「かつてモンゴルへ行ったとき、絵本を持参しました。ゲル(遊牧民の移動式テント)の中で、現地の子ども2〜3人に絵本を読んでもらったのです。彼らは日本にあるような形態の絵本をはじめて見たようで、びっくりした様子。読み終わると、大人たちがわあっと寄ってきて、持っていた絵本は取り上げられ、次々に回し読みされました。少し様子が落ち着くと、今度は子どもが、胸にぎゅっと絵本を抱きかかえたままだこかへ。その本はプレゼントしました。

モノがあふれる今の日本ではイメージしにくいことかもしれませんが、私の子どものころ、数冊の本を回し読んでいた当時を思い出させる情景でした。本って、とっても貴重なものなのですよ」

R ECITATION …暗唱

「わが家のふたりの娘たちが、暗唱するほどのめり込んだ本が、それぞれ1冊ずつあるんです。

長女は谷川俊太郎さんの『これはのみのびこ』(サンリード)を1冊まるごと覚えてしまいました。幼稚園の送迎時に、自転車の後ろに彼女を乗せていると、背後でぶつぶつぶつ……としょっちゅう繰り返していましたね。

次女は3歳のころ、キャンプで焚き火をしていると、「じゅじゅ いわなのあぶらがしたたる……」と、いきなりつぶやきだしたのです。「な、なんだ?」とその言葉を追ってみると、村上康成さんの『さかなつりにいこう!』(理論社)の一場面を暗唱していたんですね。大人になった今も、彼女の大好きな1冊です」

子どもが幸せになるために、 何があればいいのかいつも考えています

方角を見失わず描き続けたから今の私にたどりつけた

大学4年生のころはテレビ制作のアルバイトに明け暮れ、卒業時はオイルショックで就職率が悪化。けれど私は卒業とともに自立したかったの。一番給料の高い会社へという不純な動機から、文具デザイン会社へ就職することにしました。入社後は「とにかく描いていなさい」と、商品キャラクター案を自由に描く時間をもらえました。どんどん描いていると「目の力が足りない」「目立たなすぎやダメ」と、常に万人受けする絵を求められ、なんだか苦しくなってきたのです。

「自分らしい絵はどうなるの?」と迷いが生じ、2年弱で退社を決意。上司から「出社しなくていいから仕事を続けて」と請われたものの、結局は辞退し、24歳からフリーランスの道を進むことを選んだのです。

当時は高度経済成長が終わったあとで、「いろんな画風をこなせなきゃやっていけないよ」「流行中の●×さんみたいに描いて」と、理不尽な要求を突きつけられながらも、私は描き続けていました。

あるときデザイン会社がカセット絵本をつくることになり、私が絵を担当したのです。それを見た世界文化社の編集者が声をかけてくださり、そこから絵本を描く仕事が始まりました。

増え、今の私につながっていききました。見つけてもらえてうれしかった! 一つ一つでも好きなものに向かい続けていたから、少しずつ自分の絵を描けるようになっていったのです。だから私は言いたいです。道を志す若い人には「あきらめないでがんばれ!」って。

絵本が持つ役割を私は信じています

今の世の中は心配ごとだらけ。子どもたちの未来がおかしな方向へ進んでしまうのは、大人の責任だと思ふのです。私は人として、目も耳もふさぎたくない。豊かな世界が広がりが感性が育ち、すてきな人をつくります。その役割を担うのが絵本だと信じています。いつも子どものお世話になっている絵本作家として、平和を育てることをゆるやかに広げていきたいと思います。

PROFILE

ひろかわ・さえこ
1953年北海道小樽市生まれ。武蔵野美術大学商業デザイン科卒業。文具デザイナーを経て絵本制作を始める。日本児童出版美術家連盟会員。作家の日常や最新情報がらりとうかがえるブログはこちら。「のほほんぼん」…
<http://azumasea.extblog.jp/>

生誕
100年

柿本幸造さん

『どんくまのいす』『どんくまさん』でおなじみの



今もそのまま残るスケッチ。



絵本にも描かれている自宅。



庭に咲く花。



(小峰書店)



(ひさかたチャイルド)



(至光社)



自宅のアトリエで仕事をする柿本さん。

『どんくまさん』は初版1967年、『どうぞのいす』は初版1981年。誰もが一度は読んだことがあるのではないのでしょうか。かわいらしくやさしいタッチの絵本は、多くの親子に、楽しい絵本の時間を届け、心をあたたく、幸せにしてくれたことでしょう。作者の柿本幸造さんは1915年生まれ。今年が生誕100年にあたります。98年12月に亡くなりましたが、遺された多くの作品は、今も親子2代、3代にわたって愛されています。

取材・文／菅原千賀子（P.40-43, 46）撮影／石川正樹



(偕成社)

著作権保護コンテンツ

<p>「よるのかえりみち」 ウサギの男の子は、暗い夜の道をお母さんにだっこされておうちに帰ります。本屋さんもレストランも閉まっています。あたりはとても静かです。どこから話し声も聞こえるし、いい匂いもしてきました。夜の情景に心が落ち着きます。</p>  <p>作/みやこしあきこ 1,300円(管成社)</p>	<p>「ことばのいたずら」 言葉のいたずらを楽しみましょう。「ばくうそつきだよ」ってウソでしょうか。「このかんばんを読んではいけない」って看板は？ クスッと笑えるイラストとともに、言葉のいたずらが楽しめます。では一緒に声に出して読んでみましょう。</p>  <p>作/五味太郎 1,300円(絵本館)</p>	<p>「ちっちゃなサリーはみていたよ ひとりでも ゆうきを だせたなら」 サリーはクラスでいちばん小さな女の子です。ある日、友だちがいじめられているところを見かけましたが、誰も止めようとしませんでした。「ほんとうにそれで、いいのかな」。サリーは勇気を出し、たったひとりでも立ちあがりました。</p>  <p>文/ジャスティン・ロバーツ 絵/クリスチャン・ロビンソン 訳/中井はるの 1,400円(岩崎書店)</p>
<p>「おむかえ まだかな」 夕方の保育園、かなのママはまだお迎えに来ません。リズ組のときのように電車が止まったのかな？ 駅前のカキ屋さんと大きなケーキを買ったのかな？ それとも途中で風船を遊んでいるのかな？ お迎えを待つかなは、あれこれ考えてしまいます。</p>  <p>作/もとしたいづみ 絵/おかだちあき 1,300円(学研教育出版)</p>	<p>「つきよのくろてん」 冬の終わりの森の中で、シマフクロウにねらわれた黒テンは、逃げ回ります。大きなネズミを捕まえた黒テンは、キツネに奪われないように、葉早く木に登って逃げます。月が森を照らし、黒テンの体が輝きました。</p>  <p>作/手島三郎 1,700円(絵本館出版)</p>	<p>「ふくしまからきた子 そつぎょう」 原発事故のあと、引っ越したまやが、久しぶりに福島に帰ってきました。今日は、前に通っていた小学校の卒業式。自転車で出かけたまやは、さまざまなことを思い出します。懐かしい友だちの声が聞こえてきました。「ふくしまからきた子」の続編です。</p>  <p>作/松本猛、松本春野 絵/松本春野 1,300円(岩崎書店)</p>
<p>「ヘンテコはみがきこ」 ヘンテコなものをばかり作っているヘンテコかいじんが用意したのは、ヘンテコ歯磨き粉。この歯磨き粉を使うとみんなヘンテコになってしまうのです。リンゴ味だとリンゴになっちゃいました。世界中の人が使っていたから、さあ大変です。</p>  <p>作・絵/みやにしたつや 1,300円(学研教育出版)</p>	<p>「りんこちゃんのへんしん」 しましまのセーターを着たこうくんが、トラに变身したのが始まりでした。みんなも、ライオンやネコや猿になって遊び始めました。りんこちゃんはリンゴに变身しましたが、隣っでころんとしているだけはおもしろくありません。</p>  <p>作/はやめぐみ 1,300円(絵本館出版)</p>	<p>「マララとイクバル ハキスタンのゆうかん子どもたち」 借金のために4歳で働き始めたイクバルは、自由を得たのち児童労働の実態を世界に訴え続けました。学ぶことが好きなマララは、女子の教育を禁止するタリバンに屈せず、ノーベル平和賞を受賞しました。勇気あるふたりの物語は本のまん中で出会えます。</p>  <p>作/ジャネット・ウィンター 訳/道保愛子 1,600円(岩崎書店)</p>
<p>「もりのホテル」 森の中の大きな木に、1軒のホテルがありました。アライグマ一家の「もりのホテル」です。ピカピカにお掃除して、今日のお客さまを待ちます。やってきたのはヘビさん、クマさん、フクロウさんと、たくさんのお客さん。あなたも行ってみませんか？</p>  <p>作/ふくざわゆみこ 1,300円(学研教育出版)</p>	<p>「やぎのしずかのしんみりしたいいちにち」 友だちのナマズに「しんみりするうた」を歌ってもらったやぎのしずかは、しんみりするってどんなことだろうと考えましたが、わかりません。しみじみと泣きながら眠って起きたら、何を考えていたのかももう思い出せません。</p>  <p>作/田島征三 1,300円(管成社)</p>	<p>「きみへのおくりもの」 ネコのクロは、大好きなシロに湖に浮かぶきらきら光るものをプレゼントしようと悪戦苦闘しますが、手に入れることができません。でも、シロはにっこりはほえんでいます。なぜなら、大切なものは、ふたりの心の申にあることを知っていたからです。</p>  <p>作/刀根里衣 1,400円(NHK出版)</p>

<p>「だれかさん」 ネコが目覚めると、もたれかかって一緒に寝ていたのはネズミ。ふたりはびっくりしますが、ネコはネズミをかわいく思い、ネズミはネコをやさしく思うと感じます。ふたりは歌を歌い、笑って楽しく過ごします。</p>  <p>切り絵/今森光寿 文/内田麟太郎 1,300円(アリス館)</p>	<p>「絵本で学ぶ イスラムの暮らし」 アラビア語の発音により近い表記にする「イスラム」となる宗教は、世界で大勢の人が信じています。それは、どんなものなのか？ その基本的な教えや行事を、アラブ人の少年アフマドとその家族の様子を通して知ることができます。</p>  <p>文/松原直美 絵/佐竹美保 1,200円(あすなろ書房)</p>	<p>もう読んだ？ 新刊 100!!</p> <p>2015年3〜5月に発売された新刊絵本の中から、読みかきせにもおすすめ100冊を選びました。子どもたちとすてきな時間を過ごしてください。</p> <p>定期購読者限定プレゼント</p> <p>新刊絵本プレゼントの応募はアンケート用紙、またはウェブから。</p> <p>※出版社五十音順</p> <p>① マークは乳幼児から、 ② は中・高校生も楽しめる本です。</p>
<p>「やさいべたべた かくれんぼ」 「えのぐをつけて べた」。登場したのは、おくらちゃんです。おくらちゃんのお友だちも「べた べた」と、いっぱい出てきてかくれんぼを始めます。さあ、女の野菜が隠れているのかわかるかな？ 巻末に、野菜スタンプの遊び方も紹介されています。</p>  <p>作/松田奈都子 1,100円(アリス館)</p>	<p>「ことりのみずあび」 雨の夜、小鳥は明日のお天気を祈りながら、眠ります。朝になって、小鳥は「みずあびにはびったりのいいひだよ」と歌いながら、水遊びへ。ところがなかなかいい水たまりが見つかりません。やっと見つけた水たまりは……。</p>  <p>作/マリサビナ・ルツ 訳/なかがわちひろ 1,500円(あすなろ書房)</p>	
<p>「サンバギータのくひかさり」 リンは病気のお母さんのごはんを買うために、白いサンバギータの首飾りを売りたいのですが、ちょっとも売れません。がっかりしていると、やさしく声をかけてくれる女性がありました。あたたかい人々に囲まれて、強く生きるリンが描かれています。</p>  <p>文/松原 友 絵/ボン・ベレス 1,600円(今人舎)</p>	<p>「さくらいろのりゅう」 村人に「桜にたない小石のようだ」と言われているコイシに、はじめてできた友だちは、りゅうでした。コイシは、桜色の貝とりゅうの青いうろこを交換します。しかし、うろこが深い村人の目にまわってしまいました。</p>  <p>作/町田尚子 1,500円(アリス館)</p>	
<p>「かき氷 天然水をつくる」 天然水をつくる氷屋。埼玉県では長寿の阿佐美さんの家だけになってしまいました。水づくりの準備は夏が過ぎたころから始まります。氷池の掃除、点検、採氷……自然の冬の寒さを助けに手間をかけてつくられる、貴重な技術を知ることができます。</p>  <p>写真/飯島雅代 文/伊地知英信 1,600円(岩崎書店)</p>	<p>「ぞうのなみだ ひとのなみだ」 生きものたちがのんびり暮らすアフリカの森で、人間は木を伐り、田へ変えていきました。収穫間際の稲穂を食べた母ゾウは銃で撃たれ、涙を流しながら死にました。残された子ゾウは母を求めてさまよって歩き、母ゾウの死を悼む少女の日にも涙があふれます。</p>  <p>著/藤原幸一 1,400円(アリス館)</p>	<p>「ねっけつ! 怪談部」 おばけや妖怪のこわい話をしてみんなを物がらせるクラブに、熱血顧問がやってきました。発表会が近づいたので部長たちを厳しく指導します。「ダメだ、ダメだ!」。おもしろくてちょっとゾッとする落語が絵本になりました。</p>  <p>作/林家彦いち 絵/加藤休ミ 編/ばばけんいち 1,500円(あかね書房)</p>